常葉大学健康プロデュース学部雑誌
第15巻第1号，2021年3月，19－27頁

原著論文

スポーツ文化の発展史とわが国のスポーツ文化受容の社会学的考察

菊本智之　神力亮太

心身マネジメント学科

Sociological Consideration on History of Development of Sports Culture and Acceptance of Sports Culture in Japan

Tomoyuki KIKUMOTO, Ryota SHINRIKI

要　旨

スポーツは「時代を映し出す鏡」といわれている。人間とスポーツの関係について社会学的に再考する。現代の英語の“sport”には、様々な意味が含まれている。原始の人間は、抽象的な思考を持ち、絵画や道具を作成し、言葉によるコミュニケーションや歌や踊りなどで表現した。実用的な身体活動が文化的な活動となりスポーツ文化となっていく。「分かち合い」と「競争」の原理を作りだしたところに人間らしさがある。古代ギリシャのアテナイでは、心身の調和のとれた人物像を理想とした。中世ヨーロッパでは、キリスト教の影響で、運動は蔑視され、スポーツの暗黒時代と言われる。一方で、騎士らは職務上の必要性から、身体運動や訓練などを行っていた。騎士道は近世のジェントルマンシップに受け継がれ、やがて現代のスポーツマンシップの中に引き継がれる。中世の市民たちのエネルギーは、後の近代スポーツ発展の大きな原動力となった。ルネッサンスは、中世的な身体観からの脱却、近代的身体観の芽生えという意味でも重要である。ルネッサンス期の教育は、ヒューマニズム教育と呼ばれ、身体の育成が重視された。近代以降はヨーロッパ各地で、身体強化につながる体育が重視され、イギリスやアメリカでは、スポーツによる教育効果に注目が集まった。ブルジョワジーが台頭し、労働者階級がスポーツに参画するようになると、勝利することが目的化し、新しい「スポーツマンシップ」が形成されていった。明治時代には外国人教師たちによって近代スポーツが紹介された。富国強兵と殖産興業を目指したわが国では、日本独自の国家主義的なスポーツ観と武士道的スポーツ観が浸透していった。

キーワード：スポーツ文化、社会学、分かち合い、競争、近代スポーツ、教育

Abstract

Sports are said to be “mirrors that reflect the times.” We will reconsider the relationship between humans and sports sociologically. “Sport”in the modern English has many meanings. Primitive people have abstract thoughts, create paintings and tools, and express them through verbal communication, songs, and dances. Practical physical activity becomes a cultural activity and becomes a sports culture. Humanity lies in the creation of the principles of “sharing” and “competition.” In Athens, ancient Greece, the ideal person was one who was in harmony with the mind and body. In medieval Europe, due to the influence of Christianity, the movement is despised and is said to be the dark ages of sports. On the other hand, the knights were doing physical exercise and training because of their job needs. Chivalry was inherited by modern gentlemanship, and eventually into modern sportsmanship. The energy of medieval citizens became a major driving force for the development of modern sports. The Renaissance is also important in terms of breaking away from the medieval view of the body and the emergence of a modern view of the body. Education during the Renaissance period was called humanism education, and emphasis was placed on physical development. Since modern times, physical education that leads to physical strengthening has been emphasized in various parts of Europe, and in the United Kingdom and the United States, attention has been focused on the educational effects of sports. With the rise of the bourgeoisie and the participation of the working class in sports, the goal was to win and a new “sportsmanship” was formed. In the Meiji era, modern sports were introduced by foreign teachers. In Japan, which aimed to be a wealthy country and strong military and a breeding industry, Japan's unique nationalistic view of sports and samurai-style sports became widespread.

Keywords : Sports culture, sociology, sharing, competition, modern sports, education

1．はじめに

われわれが日常的に使っている日本語の「スポーツ」という言葉は、英語の“sport”から来たものであることは疑いの余地がないところである。しかし、身近に使っているこの「スポーツ」という言葉を使うとき、われわれは歴史的に様々な言語の影響を受けて成立してきた英語の“sport”が多彩な語彙を持つ言葉であることを忘れてはいけない。さまざまなニュアンスを内包する概念である“sport”は、それぞれの国や地域の歴史や経緯を経て、今や世界中に拡大し、1978年の第20回ユネスコ総会では「体育・スポーツに関する国際的な宣言」が出され、その中では「人類の無形の遺産」であると謳われた。また「人類共通の文化」（JOC「スポーツ宣言日本」）とまで言われるようになっている。

しかし、わが国で普及した「スポーツ」という文化や言葉について考えてみてもわかるように、“sport”の語源的な視点からみたスポーツ本質論だけでは、わが国だけではなく広く世界各地で展開されるスポーツ現象について正しく説明することは困難であろう。わが国の場合、明治期から大正期にかけて、欧米の近代化の中で発展した競争や競技を中心とする価値観が強調された近代スポーツが紹介されたのであるが、わが国ではこれが「スポーツ」だと認識して移入していったのである。これらが、わが国独自の身体運動文化の中にどのように入り込み、また、どのように融合、変革していったのかについては、社会史学的な視点から再考していく必要があるであろう。

近代スポーツの発展型といってもよい現代社会における「スポーツ」は、人類が到達しうる極限こそが人類の誇るべき文化やその価値であるかのように捉える向きがある。一方で、健康づくりやコミュニティーとしての手段として「スポーツ」を享受している人々は、「自分にとって何か良いもの」「やっていると何か気持ちいい」程度の、そもそも「スポーツ」とは何ぞやという問いすらも念頭にない漠然とした感覚と認識しかもっていない場合も多い。「スポーツ」を考える上で、まず、人類にとって「スポーツ」とは何か、特に、世界一の超高齢社会であり、今後もしばらく世界トップの超高齢社会であり続けるであろうわが国の社会における「スポーツ」事情を考えていくにあたって、これまでのような発展型近代スポーツの礼讃や現代のスポーツ文化の擁護だけでは、われわれがこれからの時代に要請するようなスポーツ文化を醸成していくことは期待できないであろう。

そのためには、まず、ヒトが人間という社会と文化を持つ存在になったときに、どのようなものが始原となってスポーツ文化の萌芽となったのか、またその後、どのような社会的動静がきっかけとなって人類に欠かせないスポーツ文化として受容し、洗練化され、人類の進化・発展に貢献する文化として醸成されてきたのか、スポーツ文化に大きな影響があったであろうその時代背景とその流れを社会学的視点から概観し再考することが、本研究の目的である。

特に、わが国の近代化に伴うスポーツ文化の受容や現在に至るまでの経緯には、近世までに培われたわが国独自の身体運動文化が継承されてきた上に、わが国の近代化という大きな社会体制の変革によって価値観の大きな転換点が生まれたという経緯があり、そのタイミングで移入された欧米の近代スポーツの受容という問題は、わが国のスポーツ概念の定着に大きく関わっていると思われる。このあたりを整理し、再検討することによって、現代のスポーツ文化を社会学的な視点でも論じてみたい。

2．「スポーツ文化」の字義再考

英語の“sport”を辞書的に見ると、名詞としては、1 a《個々の》スポーツ，運動；[*sg*]《一般に》スポーツ；[*pl*] 運動会，競技会：b 慰み，気晴らし，娯楽，たのしみ (fun)，(お)遊び；冗談，ふざけ，からかい，あざけり；愛の [男女の] 戯れ：c [the] もてあそばれるもの (plaything)，物笑い（のたね）；〖動〗変種；〖植〗枝変わり；〖生〗変わりもの《形質に変化の生じた個体》. 2 《口》a 運動家《sportsman ほど技量をもたなくてもよい》，スポーツマン；遊猟家：b スポーツマンタイプの人，勝敗にこだわらない人；気のおけない [気のいい] やつ；[old [good] ～] おい，きみ《主に男同士の親しみをこめた呼びかけ》；(略). 3 [～s, 〈*sg*〉] 《口》《新聞の》スポーツ欄. 4 [～s, 〈*sg*〉] 《口》スポーツカー [タイプ車]. と記されており、自動詞として、1 a 〈子供・動物が〉陽気に遊び戯れる；楽しむ；《廃》いちゃつく，戯れる. b もてあそぶ，からかう〈with〉. 2 スポーツに参加する，運動をする. 3 〖生〗変種になる. 他動詞として、1 《口》見せびらかす，これみよがしに着る[身に着ける、かぶる]；浪費する，派手につかう〈away〉. 2 〈時を〉楽しく過ごす；《廃》楽しませる〈one*self*〉. 3 変種として発生させる. などが見られる。このように現代の英語の“sport”という単語は、われわれが一般に使う運動競技としての「スポーツ」としての意味以外に、「気晴らし」「娯楽」「たのしみ」「(お)遊び」「冗談」「ふざけ」「戯れ」のような意味を含む言葉でもあることがわかる。

英語の“sport”は、語源的には紀元前5世紀頃のラテン語動詞の“deportare”にまで遡ることができるといわれている。“deportare”の de- は英語でいうところの“away”であり、portare は“carry”を意味することから、本来は「ある場所から他の場所へモノを移動させる」ことや「人が移動する」というような意味であったとされる。古フランス語に至るころには、移動の対象はモノだけでなく、こころや状況までをも含む意味に拡大し、「日常生活から移動する、気晴らしをする、気分転換をする、休養する、楽しむ、遊ぶ、喜び、慰み」といった意味を内包するようになっていったようである。中世の

フランス語では《desport》となり、14 世紀頃の中世英語では“desport”や“disport”という言葉で使用されるようになるが、やがて接頭語の de- や di- が省略され、16 世紀頃には“sporte”や“sport”という言葉になっていったとする説が有力である。英語化された当初は「必要な（まじめな）義務からの気分転換、骨休め、娯楽、休養、慰め」などを広く意味していたが、16 世紀に“sport”と使われるようになった頃に「ゲーム、戸外で楽しまれる身体活動を伴う気晴らし」を意味するようになったとされている。よって、スポーツの本質は、語源的にみれば、余暇を利用したあくまで自由な領域にある「遊び」や「楽しみ」であり、本来、何かの目的のために行われるものではなく「非実用的でそれ自体のために追求される身体的、精神的な活動」ということになるが、これはラテン語の口語（俗ラテン語）に由来するフランス語や文法・語彙などの面で多大な影響を受けている英語などを使用する文化圏に流れてきた概念であるといえよう。

次に「文化」について見てみよう。

『広辞苑』によると「文化」には「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」と記されている。現在、世界的に使われている「文化」の概念には、大きく二つに分けられており、その一つは、ドイツ的ロマン主義のヒューマニズムの立場から述べられる概念であり、「ある種において、人間が作り出した最も崇高な事柄」と述べられるものである。またもう一方は、クレーバー（Alfred Louis Kroeber: 1876-1960）とクラックホーン（Clyde Kluckhohn: 1905-1960）が提唱した「文化は作られたもの、歴史的なもの、観念・パターン・価値を含んだもの、選択されたもの、学習されるもの、シンボルに基礎を持つもの、行動と行動の産物を抽出したもの」という概念である。ドイツ的な概念に比べて幅広い概念であり、現在、多くの欧米などの社会学者や文化人類学者などが使っている概念である。

わが国では、「文化」は「文明」と明確な意味内容の区別なく明治時代から盛んに使われていたが、「スポーツ」という言葉習慣は日本人の間にはなく、「体育」「遊戯」「娯楽」「競争」などの言葉を使うことが一般的であった。実際に新聞に「スポーツ」の言葉が使われたのは大正初年であり、国語辞典（『広辞林』）に「スポーツ」という項目が載ったのは、1925（大正 14）年のことである。よって、一般人が「スポーツ」という言葉を使いだしたのは、昭和に入ってからであり、その後、第二次世界大戦などで、英語の一般使用は制限される傾向になったことから、外来語である「スポーツ」という言葉の一般的な認知と使用や拡がりは、戦後になってからといっても過言ではないだろう。

「スポーツ文化」という言葉は、1960 年代から使われ出し、言葉の内容を厳密に問おうとするスポーツ術語学研究がオーストリアのグロル（Hans Groll）らによって始められた。グロルは「身体文化（Leibeskultur）」、ドイツのエッペンシュタイナー（F. Eppensteiner）は「スポーツ文化（Sportkultur）」という言葉を使い始めている。1964 年の東京オリンピック開催の機運もあって、わが国でも 1960 年代には、体育、スポーツ、運動といった言葉が盛んに使われるようになり、1968 年のメキシコオリンピックの際に開催された国際スポーツ科学会議では、「スポーツとは、プレーの精神を持ち、自分自身や他人との闘争、あるいは自然との競争のことである」とスポーツに関する明確な定義がなされた。

世界の様々な国や地域には、それぞれの文化や社会の成立の経過があり、「スポーツ」という概念が世界中に拡大した現在でも、それぞれの国や地域には、様々な考え方や様相を見せる文化や社会の在り方があり、そこに、近代ヨーロッパの価値観である“sport”という概念が入り込んだ時、そこには、それまでの独自の文化をすべて変容させる受け入れ方をする場合とそれまでの独自の文化との混在、およびそれを融合させたりするケースが生まれてくるのである。おそらく、当のヨーロッパでも、近代に一応の概念が出来上がるまでに、“sport”の概念には、大なり小なりいろいろな文化や価値観が入り込み、融合、混在しながら塗り替えられてきたはずである。

3．原始社会における身体運動文化の始原

スポーツは「時代を映し出す鏡」といわれ、その当時の社会の様子はスポーツの在り方に映し出されるといわれている。これまでわれわれ人間（現生人類＝ホモ・サピエンス）は、サルから進化して二足歩行が可能になり、脳が発達し、石器や火を使用するようになって進化し、現在の人間のようになったと考えられてきた。しかし近年、遺伝子研究が頓に進み、最終共通祖先（Last Common Ancestor）は今のところ発見されていないが、突然変異的に忽然と人類が登場したのではなく、比較的早い時期からそれぞれの種に特徴的な遺伝子の分岐が起こり始め、両者同士の交雑が繰り返されながら、数百万年かけて遺伝子が合着し、ゆっくりと種分化が起こったとする側所的種分化説が有力になってきている。（Eugene E. Harris『ゲノム革命―ヒト起源の真実―』）これまで現生人類（＝ホモ・サピエンス）が登場したのは、およそ 19 万 5000 年前と言われてきたが、近年、モロッコで見つかった 30 万年前の骨には、現生人類（ホモ・サピエンス）と顔の特徴が似ているところが見られたことから、およそ 30 万年前から初期のホモ・サピエンスが存在し、そこから現生人類へと進化していった可能性があることが報告されている。

いずれにせよ、われわれの直接の祖先であるホモ・サピエンスも初期の段階では、他の種の動物とさほど変わることのなく、文化らしきものも彼らの生活の中で成立しておらず、人類の長い歴史の中では、基本的な運動能

力が狩猟的運動能力の良し悪しに直接影響し、生存や食生活を左右したであろう。その後、個々に生存のために食を手に入れて生きてきた状況から、狩猟や生活のために道具を作成し、その操作を伴う運動などが行われ、共同生活による生活を行うようになると、そこでは狩猟の方法や技術的な動作を教える、同じ形の道具を作って効率化を図る、道具の作り方を教えるなど、目的のために未来を予想して計画的に物事を行うことなどが行われるようになっていく。つまり、原始社会の人間が残した遺跡からは、獲物を捕るために狩猟の際に必要となる状況を想定して道具を作成したり、身体能力を高めたりしていたことを示す痕跡が残されており、それらを他人や次世代に伝える（伝承する）ことなどが行われ、原始社会の人間たちも身体的な能力を高度化させていたであろうことが知られているのである。おそらくそこでは、これらの道具を使用するために必要な体力や道具を操作する能力を身につけるために身体性を拡大させていったということであり、それは他の動物には見られない知的な活動が行われていた証といえるのである。しかし、このような狩猟や戦いという実用目的で行われる身体運動やその能力開発などの段階では、スポーツという文化には未だ成り得ていないのである。

その後の展開として、原始の人間が残した絵画（壁画）などからは、抽象的な思考を持って絵画（壁画）を描いた様子や言葉によるコミュニケーションがより発達して、歌や踊りなどで表現を行っていたことなどが窺い知ることができる。このような道具の使用や表現という人間らしさの能力の発達は、文化の形成に大きな役割を果たし、生活のための実用的な身体活動であったものが、やがて文化的な意味と性格を持つ活動へと変容していくことになり、後のスポーツ文化の萌芽となっていくのである。

４．人間の有する「分かち合い」と「競争」の原理

人間特有の能力を身につけた人々の共同生活の中では、群れで狩猟を行う動物とは違う、「分かち合い」の考え方や行動も見られるようになる。群れをなす動物は、親が子にエサを与えることを除けば、群れで狩猟を行い、獲物を仕留めたとしても、強いものから優先的に食にありつき、弱いものがその残りを食べていく。このような行動は、結果的にエサを分配していることになるが、意図的に分かち合っているわけではない。余りものに順番にありついているだけである。最悪の場合、エサにありつけないことも出てくるのである。したがって、オオカミやハイエナなどは、分け前をもらったら急いで取られないように食べている。しかし人間の場合、自然を相手とする狩猟・採集の共同生活の中では、お腹がすいたら獲物や植物をとって家族みんなで分かち合って食べる。必要な分だけ獲物や植物を採集してきて、その場ですべてを分かち合って食べてしまうので、余剰はほとんど生まれないのである。よって、ここに初期的な「分かち合い」という精神が見られるようになり、そこには極端な上下関係はなかったのである。

藤田（2007）は、「人間は、『分かち合い』の中で、お互いを（強者であろうと、弱者であろうと）『かけがえのない』ものと認め合い、自己の欲望を抑制し、他者に配慮し他者を受け入れる『やさしさ』をもち、感情・意識・価値観などを共有し、『ともによりよく生きる』ことを目的とした集団（家族・居住地からはじめ、その他さまざまな集団）を形成してきた」と述べている。つまり、人間だけが、弱肉強食という本能以外に、「分かち合い」という原理を作り上げ、その原理に基づく社会を作ってきたのである。利害関係のない家族や友人、恋人などの関係を考えた場合、損得勘定のない「分かち合い」が基本であり、このような関係にあるときの「分かち合い」においては、自然と人間は自らの欲望を抑えて我慢する。お互いをかけがえのない存在として認め合い、ともにより良く生きることを目的として「分かち合い」という原理に基づいた活動などができた時には、その我慢は、決して辛いものでも悲しいものでもなく、むしろ幸福感を感じることさえあるのである。

一方で人間は、1万数千年くらい前から農耕を行い定住して暮らす者が増えていったといわれている。農耕が行われるようになると、集団の中で「教える」「教えられる」という内容はさらに広がり、知的な内容、精神的な内容、体育的な内容の3つに分類できる内容が集団の中で行われていたことが知られている。

農耕や家畜による生活の安定は、自然を相手に狩猟・採集を行っていた時よりも多くの作物や家畜を自ら生み出すようになり、自分たちが食べるよりも多くのものが作れるようになると、その余剰は財となっていく。そこに財が発生すると、「その余りは誰のものか」という所有の欲望と争いが生じるようになる。敵対する関係であれば闘争になるが、身内や仲間の間で殺し合いや闘争となっては、自分たちの集団の力が削がれることになるので、そのような中で次第にその集団内での約束事や決まり事（ルール）の中で解決するようになっていくのである。意図的に「競争」しようとするのは人間だけであるが、「競争」というルールを伴った原理を生み出したところに人間らしさがある。他の動物でも闘争は行うが、人間のように相手に勝つために準備をしたり、目標を立てて計画的にそれに向けて努力や練習をするわけではない。この競争原理が働くことにより、強い者や頭の良い者が、その多くを所有することになり、やがて格差ができ、上下関係ができていくのであるが、人間は競争をするために、また勝利を得るために過去を記憶し、今を考え、未来に向けて努力や工夫を重ねることができる存在になっていったのである。

それを成り立たせる条件として、必要な役割や義務、責任が課せられ、しきたりや儀式などを守らなければな

らない社会が形成されるのである。また、時間や空間を共有する呪術的・儀礼的な身体活動や成人になるにあたっては、共同生活の構成員として認められるために人間としての強靭さを示す、イニシエーションとして、身体に痛みを伴う体験や精神的に苦痛を伴う恐怖体験などが課せられることが多くあったことが知られている。

これらの人間社会の形成の過程が、人間の文化を生み出し、余暇の時間に行われる遊びや競争の要素を伴った身体活動がそれぞれの集団や社会の中で次第に文化的な意味を持つことによって、後に現代のスポーツ文化へと発展する素地が生まれてきたと考えられる。

5．古代ギリシャの体育から近代体育への道程

前述のように、先史時代から古代文明の時代になると、社会の統治機構が整い始め、帝国的国家組織が形成されて、王や貴族、官僚などの特権的な地位や身分が生まれたことが明らかになっている。特権的な地位の象徴は、卓越した身体とそれに伴う高い身体能力を有することであったが、特に機動性の高い戦車や弓矢、剣などが戦時において重要な役割を果たすものとなり、これらの武器の操作や戦争に強い人間が権力者となっていく。これらの武器の操作法やその修練、戦闘の技術などはスポーツとはいいがたい。しかし、平時における武器や兵器の操作法の競い合いやこれらの武器を使用した鳥打やカモシカ猟などは、やがて特権階級や高い地位にある者だけに許された権力の象徴としてのスポーツとして成立していったのである。また、これらの権力者によって、兵士に軍事訓練の一環として、レスリングや木刀試合、水泳、弓矢などの競争を行わせていたことが知られており、そのほかにもダンス、体操、アクロバットを行わせるなど、競技的な身体活動やアクロバティックな身体活動が行われていたが、それは、権力者によって超自然的な存在であることを示す手段として行われたり、宗教的な手段であったと考えられている。これらの身体活動は、時にはそれに代価を払って見物するという経済的な図式も生まれており、スポーツ専業者やショー的な意味でのスポーツ活動など新たな形が芽生えてくる。

紀元前8世紀頃からは、エーゲ海を中心とした古代ギリシャ文明が発達し、そこでは市民の自由、平等、自治をモットーとし、土地所有と奴隷所有を共通の基盤とする市民によってポリス（都市国家）が形成され、そこで人間のよりよい文化的な生活を営むための手段として教育が行われるようになり、有能な市民を育成するために、体育を重視した教育〈ギムナスティケー〉が行われた。最も発展したポリスの代表であるアテナイでは、民主的な社会は、個々の市民が社会的役割を果たすことによって国家が成り立つと考えられており、個人の能力を自由に伸ばすことによって、国家の繁栄を実現しようと計った。よって、文武一体の人間形成を目指し、戦時だけでなく平和時の国家にも奉仕できる心身の調和のとれた人物像を理想とした。このような調和的な人間の完成を目指すことが神に対する義務と考え、やがて宗教的な祭礼にも結び付き、古代オリンピックの盛衰は、まさにアテナイの繁栄と衰退に合わせるかのようである。紀元前146年にはアテナイだけでなくギリシャの多くのポリスを支配下においた古代ローマは、アテナイの教育や文化を模倣、採用したものの、すでに最盛期のような調和的な人間の完成や教養を高める風潮や性格は失われており、退廃的、奢侈的、享楽的な生活に飽き足らないローマ人にとっては、優れた技術やたくましい身体、体力などは、見て楽しむショーとしての興味や鑑賞の対象でしかなく、死傷者が出るような人間対人間の格闘技、野獣対人間、戦車競技など、強烈な刺激を求める傾向が非常に強かった。このような状況を風刺した古代ローマの詩人ユベナリス（Decimus Junius Juvenalis: 60-128）は、「だからもし、祈るならば、健康な身体に健康な精神があれかし、と祈るべきであろう」という詩を残している。この詩は、わが国では「健全な精神は健全な身体に宿る」という言葉で広く知られているが、これは、富国強兵によって近代化を目指していたわが国においてスローガン的に用いられたものである。ユベナリスは「健全な精神は健全な身体でなければ存在しない」とは言っていない。むしろ、「いくら健康で頑強な身体を持っていても、健康な精神はなかなか伴わないので、もし神に祈るならば、健全な身体に健全な精神が伴うように祈るべきだ」と心身の調和や一致の難しさを述べているのである。同時に、ユベナリスの心身観からは、大変難しいことではあるが、健全な心身の共存の可能性があることも認めている。

中世ヨーロッパにおいては、キリスト教が392年にローマ帝国の国教となってから、中世を通じて西欧全般の民族を教化した。心身を調和的に発展させようという古代ギリシャ以来の人間観に対して、初期のキリスト教では、身体は精神よりも下位に位置し、魂は神のもので永遠不滅であるとされた。官能的快楽や欲望の根源を生み出す肉体を否定することで神の恵みを受けることができる、という禁欲主義とともに発展したため、スポーツや体育、爽快感を求めるような活動、運動に対しては、蔑視される傾向にあり、スポーツの世界においては暗黒時代と言われることもある。

一方で、中世社会は、社会体制としては領主封建制の社会であったために、騎士やその修行過程にある騎士の子弟や貴族などは、職務上の必要性から、身体運動や訓練などを行っていた。騎士には、軍事目的の身体的能力向上のほか、精神的特性や領主への忠誠、貴婦人への奉仕、モラルとしての騎士道などが要求され、日ごろの修練の成果を披露する場として、トーナメント（集団戦のトゥルネイと個人戦一騎打ちのジョスト）などが行われた。このように培われた騎士道は近世のジェントルマンシップに受け継がれ、やがて現代のスポーツマンシップ

の中に引き継がれており、スポーツの発展史において重要なプロセスであったことがわかる。

中世の市民たちは、中世都市が確立されていく中で、自衛、自決の意識を強くもつようになり、レスリングやフェンシング、弓、弩などの訓練を日常的に行っていた。また、近代スポーツの原型となった打球戯や木球戯、街頭球技なども行われるようになり、民衆や聖職者までもがこれらの活動に熱中していた。中世以来、抑圧され続けた民衆のエネルギーは、これらの活動を行うことで一気に爆発し、後の近代スポーツの発展の大きな原動力となったといってよい。しかし、一方でスポーツに熱中するあまり、生産労働がおろそかとなり、社会秩序も乱れがちになって、軍事訓練から逃避する者も多く出てきたため、国王がたびたび、スポーツの禁止や勅令を出しているが、その効果は薄く、民衆は禁止を無視してスポーツにふけり、熱狂していった。皮肉なことに、国王の出す禁止令の対象となった種目のほとんどが、後に発展して近代スポーツの礎となっている。

6．ルネッサンスの勃興とスポーツ

14 世紀に入ると、北イタリアで、神中心のキリスト教とその教会の支配下にあった中世文化を否定し、人間中心の近代文化に展開していく契機となるルネッサンスが興った。ルネッサンスは、中世封建主義やキリスト教思想によって束縛された中世文化に対する批判的精神であり、思想的、哲学的にも人間中心の近代文化への転換となる動きであり、ヨーロッパ社会を変容させる革新的な文化運動であった。中世的な身体観からの脱却、そして次なる近代的身体観の芽生えという意味でも重要である。

ルネッサンスの人文主義者たちは、古代ギリシャの時代を人間性が肯定されていた理想の時代であると捉え、古典による教養こそが人間を人間たらしめるという古典文化の復興を目指し、心身を調和的に発展させようとする身体観が重視された。このような考え方によって人間形成を目指す教育は、ヒューマニズム教育と呼ばれ、教育における身体の育成も重視すべきものとして再認識された。

このような価値観の転換によって、イタリアのビッドリーノなどは、人文主義に基づく全人教育のための寄宿学校を創設し、キリスト教と古典教育との調和を知育・徳育・体育の一体化の中で図ることを目的としたルネッサンス人文主義教育を具現化した。特徴としては、軍事訓練や遊戯からも解放された体操を学校で初めて教えたことで知られ、高等教育に欠かせない健康ではつらつとしたたくましい身体を持った人間を理想とする教育が行われた。この寄宿学校「喜びの家（Giocosa）」の教育の形態は、パブリックスクールにもみられるように、ヨーロッパの教育の一つのモデルとして確立されていくのである。このイタリアで確立したヒューマニズム教育は、イタリアよりもむしろ他のヨーロッパ各地に広がりを見せて、ドイツではギムナジウム（Gymnasium）の生みの親ともいわれるシュトゥルム、フランスでは『教育論』の中で身体育成や鍛錬主義を唱えたモンテーニュ、イギリスではエリオットやマルカスターたちが身体運動の必要性だけでなく、休息やレクリエーションなども必要不可欠であることを提唱し、ゲーム的な教材の活用して身体を鍛錬していく方法を行った。

近代以降を概略すれば、ヨーロッパ大陸の各地では、国家・民族意識の高まりが武力闘争に発展したことから、身体強化につながる体育が重視され、優れた体操を手段として、組織的・計画的に実践することによって、強靭で有能な国民を育てようとする方向性が強まった。一方で、イギリスやアメリカでは、スポーツによる教育効果に注目が集まり、体育の方法論としてのスポーツが如何に教育効果を上げるものであるかについて、研究、実践が高度化されていった。

7．近代スポーツのイデオロギー

17〜18 世紀になると、前近代イギリスのミドリング・ソートと呼ばれる中間層の中から、商業的に成功して富を手に入れた市民が出てくる。商業や小土地を所有することによって、自立できる財産を持ち、産業の発展に伴って資本を蓄えたミドルクラスであり、ブルジョワジーと呼ばれる中産階級の市民が台頭してきた。ブルジョワジーの台頭は、それまでの封建制を打開し、市民が政治的・経済的支配権を獲得して、近代資本主義への道を開くという国民国家の時代を築き上げていくことにもつながった。このような社会の変化は、スポーツに対する欲求やスポーツの在り方、考え方にも大きな変革をもたらすことになる。

前近代までの「遊戯」から近代における「スポーツ」への発展は、国民主権主義、基本的人権の尊重、法の支配、民主的政治制度の確立など、近代民主主義的思想・制度の原型が形成されたことによって成し遂げられたといっても過言ではないだろう。つまり、経済面における産業化、政治面での民主主義、価値観の面での自由や平等の理念といった近代社会成立の条件は、近代スポーツという新しいイメージを創造する上でもなくてはならない重要な条件だったのである。

このような社会の近代化や世界にその力を誇示する上で大英帝国としてのエリート教育を必要とするようになった。イギリス社会では、19 世紀中頃からキリスト教内部から、人間形成の手段として、肉体的鍛錬に道徳的価値を与えるという「筋肉的キリスト教（Muscular Christianity）」と呼ばれる思想運動がおこった。パブリックスクールやオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などの教育機関においても、ジェントルマンの養成のためにスポーツを教育の手段にしようとする教育イデオロギーが興った

のである。このような背景から、イギリスは近代スポーツの中心的役割を果たすようになり、さらにそれを発展させて、自国の世界戦略とともに世界各地に近代スポーツを普及させていったのである。当初、課外活動として位置づけられていたフットボールやクリケットなどのスポーツを道徳教育の手段として加えたことで、アスレティシズムは一層興隆し、やがて帝国主義の風潮の高まりとともに、筋骨たくましいスポーツマンが理想的なジェントルマン像と重ねられていったのである。

もともと社会の実質的な支配階級であったジェントルマンの間では、「それ自体を楽しむために行い、関わっているすべての人を尊重し、フェアプレーに徹し、自制すること」がジェントルマンにふさわしい態度とされていた。スポーツに対しても、これに基づいたジェントルマンシップに基づいた精神性が本来のスポーツマンシップであった。しかし、19 世紀後半から 20 世紀にかけて、イギリス社会の近代化の過程において、上位の中産階級がジェントルマンに属するようになると、「ジェントルマン」は「教養や徳性を身につけた紳士」を特徴づける言葉となり、さらに労働者階級がスポーツに参画するようになると、ジェントルマンの間では特に勝敗をつけなかったスポーツも、勝敗を目的とするスポーツへと変容し始めた。勝利することが目的化していくことになり、その社会的変容の中で、新しい倫理的な意味内容を整えた「スポーツマンシップ」が形成されていくことになる。

8．わが国のスポーツ文化受容について

わが国では、江戸時代以前に海外から移入された運動文化は、古くは中国や朝鮮などから持ち込まれたものがいくつか見受けられるが、それらはわが国の文化の中に浸透し、徐々に日本風にアレンジされ、日本の運動文化の一部と化していった。江戸時代のほとんどの期間は、公にはオランダ・中国・朝鮮通信使を通じて（非公式には、間接的にロシアや琉球などからも）若干の海外の運動文化が入って来ているようであるが、市民レベルでは基本的に欧米の運動文化はほとんど入り混じることはなかったといってもよいであろう。よって、江戸時代以前のわが国では、いわゆる「近代スポーツ」やその原型となっている西洋的な「スポーツ」が行われることはなかったと考えてよい。

幕末期に海外列強諸国からの圧力により、いくつかの港を開講すると、外国人が横浜、長崎、神戸などに居留地を構え、住み始めた。また、幕府なども勤王に備えるためにフランスから軍事教官団を招聘し、西洋式の軍隊を導入するなどしたため、わが国の身体運動の様式に影響を与えたと考えられるものもある。しかし、これらは軍事における身体運動であり、スポーツという文化が移入された事象としては、大きな影響はないであろう。むしろ、アメリカ、イギリス、フランス、オランダなどの役人、商人などが、母国で行っていたレガッタ、ボーリング、ビリヤード、バドミントン、ゴルフなどのスポーツを居留地で楽しみ始めたことや、その後、明治時代に入って学制を整備する段階で招聘した大学などの外国人教師たちによるスポーツの紹介や啓発が、わが国のスポーツ文化導入に大きな役割を果たしている。近年の研究では、特に東京大学に招聘されたイギリス人教師のフィレデリック・ストレンジ（F.W.Strange: 1854-1889）は、様々なスポーツを紹介するだけでなく、数々の競技会を開催し、組織づくりや運営のノウハウも伝授しながら、スポーツの楽しさを学生たちに伝えていることが明らかになってきた。これまでの研究では、外国人招聘教師たちが自然な形で紹介し、広まったという考え方が一般的であったが、昨今では、このストレンジをキーマンとして、東京大学が積極的にスポーツ導入に力を注ぎ、日本にスポーツ文化を定着させたとする見方も出てきている。

その他、明治期以降に海外から入ってきたスポーツ文化は、学生を中心としながらも、職業人や社会の人々に徐々に浸透していくことになるが、西洋のスポーツを享受するには、経済的な問題や自由な時間、つまり余暇を有する限られた人たちだけが取り組める文化であったことから、西洋的な自由な気風の中でスポーツ文化を享受する状況はなかなか生まれなかったのである。

やがて、1894（明治 27）年の日清戦争、1904（明治 37）年の日露戦争が起きると、外国人教師たちの持つスポーツ観とは異なる日本独自の国家主義的なスポーツ観が形成されていくことになる。また、これらのスポーツ観や身体観、心身観などを形成する上で、中心的な位置づけとなっていったのが、武士的スポーツ観であった。明治時代になったとはいえ、まだまだ多くの江戸時代に生きた人々がおり、日本人の精神性として、やはり身近なものが武士道精神であったといえる。

わが国の近代化は、欧米の列強先進国に「追いつけ」「追い越せ」のスローガンのもと富国強兵と殖産興業に励んでいた。そこに移入されたものは、すでに競争原理を中心とするユーロセントリズムを前提とするスポーツ文化であり、興隆期であったイギリスやアメリカの競技化された近代スポーツだったのである。そして、そこで見られる思想も当時のイギリスやアメリカの近代的な思想によって形成された精神性であったといえよう。よって、“sport”という言語を長い歴史の中で使ってきた欧米のスポーツ文化を享受している人々と、わが国の伝統的な身体運動文化の上に、ユーロセントリズムの思想によって近代化された競争原理を中心に置くスポーツ文化を享受した日本人とでは、「スポーツ」という言葉自体に異なるニュアンスや意味合い、価値観が生じているのであり、これを「人類共通の財産」と一言でまとめてしまうことには、多くの課題が残されているのではないだろうか。

9．21 世紀スポーツの未来と展望（おわりに）

現在、われわれ日本人の間でも「スポーツ」という言葉の多義性には、随分と許容できるようになってきた。「スポーツウェア」「スポーツドリンク」「スポーツニュース」など、全く運動としての「スポーツ」に関わっていない人でもこれらを利用している。一般大衆に向けて発信される新聞各紙やテレビ番組でも、必ずと言ってよいほど「スポーツ」を取り扱っているし、「スポーツが苦手」「好きじゃない」という人でも「スポーツドリンク」を飲んだり、「スポーツウェア」や「スポーツシューズ」を愛用している。もはや「スポーツ」は、われわれの日常になくてはならないものとなっている。

わが国の「スポーツ」に対する考え方は、第二次世界大戦の敗戦と 1964（昭和 39）年の東京オリンピックがやはり大きな出来事であったといえるだろう。第一次世界大戦を経て、軍部の力はますます強大になり、日中戦争から第二次世界大戦へと突入し、敗戦後、これらの精神性や価値観は、多くが否定され、現代社会の変革に沿ったスポーツ観が、時代時代ごと考えなおされ、生み出されてきた。

わが国は、世界トップの超高齢社会であり、今年も記録を更新している。先の東京オリンピックからは 56 年以上が経とうとしているが、ルールを定め、平等、自由を原則として「より速く、より高く、より強く」を目標として競争を行い、客観的に誰が一番優れているか順位を決めようとするこの近代スポーツの原理は、今もそのままオリンピック精神に反映されている。一ついえることは、「より速く、より高く、より強く」という言葉の中には、単に他者との競争に勝つという結果としての「速く、高く、強く」ではなく、自らの過去「より」今、今「より」も未来への可能性の追求をしようとする視点も持ち合わせているところは重要である。しかし、いずれにしてもこの近代スポーツの原理では、「一人の勝者とその他の敗者」という図式になってしまう。近代社会の発展の中で追求されてきたチャンピオンシップスポーツを中心的な価値とする考え方が、長寿化、少子高齢化、超高齢社会を迎えている現代のわが国のスポーツの姿として、時代に求められているスポーツの在り方に適っているのかどうか再考する時期に来ているといえよう。

現在のわが国の学校教育では、保健体育科の授業は、「スポーツ科」といっても過言ではないほど、「体育」と「スポーツ」の意味、内容は混同され、「体育の授業＝スポーツの実践」のような様相を呈している。すなわち、学校教育における「体育」領域の授業は、活発な身体運動を手段とする教育であることから、その延長線上に競技スポーツの実践者、つまりはアスリートの育成を一つの目標とする考え方が生じている。一方で、世界トップの超高齢社会にあって、健康寿命も同時に延伸しているわが国において、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するため（学習指導要領解説 p277）の「スポーツ」を享受するという志向性を求める考え方もある。このような志向性の違いと混在という状況が生まれてきた背景には、「スポーツ」が人間自身の自己目的的な性格が強いことに対して、体育は教育などのある目標、目的の方向に身体運動を通して近づけようとする行為であるというそもそもの違いがあるからである。しかし、現代の社会においては、スポーツを手に入れる（身につける）場面としても体育が使われ、体育においても「スポーツ」を教材として有効に活用することで、その成果と意味合いは相乗的に大きなものとなっている。「スポーツ」と体育のそれぞれの違いについても、その歴史的な経過と経緯の理解を深めていることが重要であり、二者択一ではない有機的な連関にその意味を見出すべきである。

参考文献

青柳まちこ『「遊び」の文化人類学』講談社，1984

浅見敏雄（他）編『現代体育・スポーツ大系　第 2 巻　体育スポーツの歴史』講談社，1984

浅見敏雄（他）編『現代体育・スポーツ大系　第 3 巻　現代社会とスポーツ』講談社，1984

浅見敏雄（他）編『現代体育・スポーツ大系　第 6 巻　総合競技会オリンピック』講談社，1984

阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会，2009

新井　博編著・井上洋一（他）『新版　スポーツの歴史と文化』道和書院，2019

アレン・グットマン・谷川稔（他）訳『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂，1997

稲垣正浩（他）『スポーツ史講義』大修館書店，1995

稲垣正浩（他）『図説　スポーツの歴史―「世界スポーツ史」へのアプローチ』大修館書店，1996

今村嘉雄『修訂　十九世紀に於ける日本体育の研究』第一書房，1989

今村嘉雄『日本体育史』不味堂出版，1970

江田昌佑監修・二杉茂（他）編『スポーツ学の視点』昭和堂，1996

エリアス・ノベルト（他）大平章訳『スポーツと文明化―興奮の探求』法政大学出版局，1995

エリアス・ノベルト「スポーツと暴力」桑田禮彰訳、栗原彬（他）編『叢書　社会と社会学 3　身体の政治技術』新評論，1986

大林太良（他）『スポーツ』（東京大学公開講座 4 ）東京大学出版会，1991

菊本智之編著・前林清和・上谷聡子『スポーツの思想』道和書院，2018

木村吉次編『体育・スポーツ史概論』市村出版，2001

木村毅『日本スポーツの文化史』ベースボールマガジン社，1981

坂上康博『スポーツと政治』山川出版社，2001
佐藤臣彦「体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察」『体育原理研究』第 22 号，1991
JOC HP「スポーツ宣言日本〜二十一世紀におけるスポーツの使命〜」：http://www.joc.or.jp/about/sengen/
身体運動文化学会編『身体教育のアスペクト』道和書院，1998
新村出編『広辞苑　第六版』岩波書店，2008
スポーツ史学会 30 周年記念事業委員会編『スポーツ史研究の未来―スポーツ史学会 30 周年記念誌―』スポーツ史学会，2017
寒川恒夫編『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店，2004
寒川恒夫編『図説スポーツ史』朝倉書店，1991
高橋幸一『スポーツ学のルーツ―古代ギリシャ・ローマのスポーツ思想』明和出版，2003
高橋作太郎編『研究社リーダーズ英和辞典』研究社，2015
多木浩二『スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム』筑摩書房（ちくま新書），1995
成田十次郎（他）編『体育・スポーツの歴史』日本体育社，1979
福永哲夫（他）『体育・スポーツ科学概論―体育・スポーツの新たな価値を創造する』大修館書店，2011
藤田隆正『新・倫理考―「分かち合い」の発見』晃洋書房，2007
ベラ・オリボバ・阿部生雄（他）訳『古代のスポーツとゲーム』ベースボールマガジン社，1986
前林清和『Win-Win の社会をめざして―社会貢献の多面的考察』晃洋書房，2009
守能信次『スポーツとルールの社会学』名古屋大学出版会，1985
文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説　保健体育編』東山書房，2018
文部科学書 HP「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」
：http://www.mext.go.jp/unesco/009/1386494.html
ユージン・E・ハリス著・水谷淳訳『ゲノム革命―ヒト起源の真実―』早川書房，2016